MEDIA IMFOMATION

2023年11月吉日

iCraft レースレポート

ＥＮＥＯＳ スーパー耐久シリーズ2023 Supported by BRIDGESTONE
第7戦「S耐ファイナル 富士4時間レース with フジニックフェス」

2023年11月11日～12日　富士スピードウェイ（静岡県）
予選（土）：曇りのち雨／ドライ・ウエット　入場者数：9,900人
決勝（日）：曇り／ドライ　入場者数：16,600人
OHLINS Roadster NATS（マツダロードスターND5RC）
金井亮忠／山野哲也／野島俊哉

勝負の1戦で総合力を発揮しポール・トゥ・ウィン！
念願のST-5クラスシリーズチャンピオンに輝く

前回の第6戦岡山で2位表彰台を獲得し、ライバルに対して12.5ポイント差をつけた#72 OHLINS Roadster NATS。最終戦では2位以内に入れば確実にシリーズチャンピオンが決まるという状況だったが、舞台となる富士スピードウェイはライバルである17号車マツダ・デミオが得意とするコース。仮に彼らがポール・トゥ・ウィンを果たし、72号車が3位以下となると逆転で王座を奪われてしまうこととなる。それだけに、今回はドライバーだけでなくNATSの学生たちも、いつも以上に気を引き締めてサーキット入りし、走行前の準備も念入りに行なった。

【公式予選】
朝から濃い霧が立ち込めた富士スピードウェイ。9時05分からのウォームアップ走行では、路面が一部濡れている状況なかでセッションが進んでいくこととなった。ウエット路面になれば、ライバルに対して分があるのではないかと予想していた72号車陣営。その言葉通り、ST-5クラスでトップタイムを記録した72号車は、良い流れを作って午後の予選に臨んだ。

Aドライバー予選は今回も金井が担当。予選前は雨が降っておらず、ドライタイヤでコースインしたが、その直後から雨が降り始め、徐々に路面コンディションが変わっていく状況となった。その中をドライタイヤで走るというのは難しい状況だったが、金井はライバルに0.4秒の差をつける2分06秒330をマークし、ST-5クラストップとなった。

続くBドライバー予選では山野がマシンに乗り込み、アタックを敢行。Aドライバー予選と比べて雨量が若干増している状態ではあったが、時より雨が止むシーンもあるなど最後まで安定しないコンディションの中での予選となった。山野は少しでもグリップの良い場所を探りつつ、無線でセクタータイムの変化も参考にしながらタイム計測を繰り返し、最終盤に2分08秒968を記録。ここでもトップでセッションを終え、勝負の1戦でポールポジションという最高の予選結果を得ることに成功した。

これで、17号車との差が2ポイント広がり、決勝レースは3位以内に入ればチャンピオンが決まるという状況に持ち込んだ。

金井亮忠
「僕がコースに出ていった時は雨がポツポツ降っていましたし、午前中の雨の影響で路面も完全に乾き切っていなくて、滑りやすい状況ではありました。その中で路面のグリップするところがどこかを探りながら走りました。自分なりのベストは尽くしましたが、ここまでタイムが伸びるとは思っていなかったです。アタックを終えて戻ってきたら良いタイムだったという感じです。チームも万全な状態ですし、決勝は自分たちのレースをするだけかなと思います」

山野哲也
「Bドライバー予選では雨量の増減はあったものの、完全にドライになることはなかったです。毎周コーナーを曲がるたびにグリップ感が変わるなかで、少しでも良くなった時に、良くなった場所を探すのが大変でした。なんとかセッション後半にタイムを出すことができて、そのコンディションに適合させることはできたかなと思います。あとは金井選手のタイムがすごく速かったので、それに助けられたところが大きいです。決勝は確実に走り切ることと、あらゆる“アンラッキーな要素”を排除して、3位以内に入ることだけを考えて臨みたいです」

【決勝レース】
予選日までは雨が絡む天候だったが、決勝日は午前中に晴れ間も見えるなど安定したコンディションとなった。今回は4時間の耐久レースで、Aドライバーの最低乗車時間は60分、途中に3回のピットストップを行なわなければいけないというフォーマットだ。さらに72号車に対しては今季から導入されたAドライバーハンデが加わり、最初のピットストップに10秒間作業を行わず静止するという要件もクリアしなければならなかった。

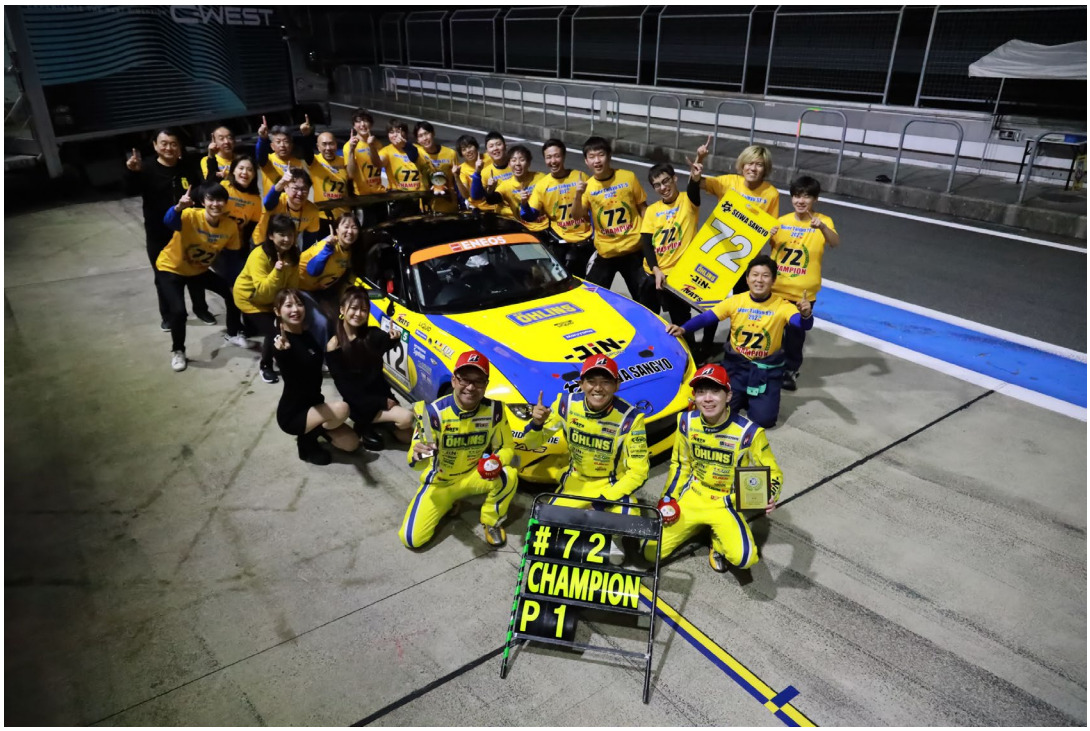
ST-5クラスのポールポジションからスタートという、これ以上ない条件下でレースを始められる72号車。それでも、決勝でライバルたちがどのように追い上げてくるかは未知数だ。緊張感も高まるチャンピオン決定戦ではあるが、レース前にチーム全員が“いつも通りのレースをする”ということを確認し合い、今季最後のレースに臨んだ。

スタートドライバーは今回も金井が担当。1周目から各クラスで激しいポジションの奪い合いが繰り広げられ、ST-5クラスも72号車を含めた5台が接近し、バトルを繰り広げた。金井は無理にポジションを維持するよりも、自分たちが安定したペースで走ることを意識し、7周目にトップの座を明け渡したものの、冷静に周回を重ねていった。

開始から1時間が経過すると、ライバルたちが続々と1回目のピットストップを済ませる。ここでペースが安定している72号車は、すでにAドライバーの最低乗車時間をクリアしているが、金井のスティントを続行。ここで徐々にタイムを稼いでいく。そして、スタートから1時間40分が経過したところで、1回目のピットストップを行い山野に交代した。ここではAドライバーハンデである10秒ストップの消化と、給油、左2本のタイヤ交換を行なったが、NATSの学生たちが迅速かつミスのない作業を披露。トップのままでコースに復帰することに成功した。背後にはライバルの17号車が迫っている状況だったが、山野が順調に後続を引き離していき、レースの折り返しがすぎたところで9.3秒のリードを築いていった。

後半は、アクシデントに巻き込まれないようにしながらも、安定したペースでレースを進めていき、スタートから2時間30分が経過した67周目に2度目のピットストップ。給油と右側２本のタイヤ交換を行い、野島がマシンに乗り込んだ。2分06秒779のチームベストタイムを記録するなど、速さを見せつつ安定した走りを披露。21周を走破し、ゴールまで残り45分のところで最後のピットインを行なった。チャンピオンに向けた最終スティントを担当する山野は、ここまでチーム全員で繋いできたバトンを受け取ると、ゴールに向けて無理をしない走行を徹底。後方から17号車が差を縮めつつあったが、それまでに72号車の全員で築いた大量リードがあるため、焦ることなくチェッカーの瞬間まで走り続けた。

そして、スタートから4時間が経過し、チェッカーフラッグ。109周を走破し、今シーズン３勝目を挙げるとともに、念願のST-5クラスシリーズチャンピオンを手にした。



金井亮忠
「やっぱり抜かれたくないので攻めたい気持ちもありましたが、その代償がスティントの後半に来てしまうことも分かっていました。ある程度はセーブしながら安定したペースで走り続けましたが、1時間を過ぎたあたりから前との差が詰まってきて、最終的にトップでバトンをつなぐことができました。いつも通りのパターンで勝つことができました。思えば、クルマを作り直して臨んだ富士24時間では『ちゃんと走ってくれるかな？』という不安もありましたし、今季の学生たちにとってもデビュー戦でした。そこから、チーム全体が強くなりました。本当に最高の1年となりました」

山野哲也
「今週のレースを振り返る上で、金井選手の予選での速さが大きかったです。金井選手のタイムでチームの士気が一気に上がり、A・B両ドライバーでトップを獲ることができました。ポールポジションからスタートできたことで、レースの流れも大きく変わりました。ピットインのプランも事前に数パターンを考えて臨みました。決勝中はアクシデントに巻き込まれないようにレースを進めるのが何よりも大事でした。ハイペースを維持しつつ、混乱をすり抜けながらゴールまでクルマを運ぶ。いつもの手法ではあるけれど、今回はより気をつけて走りました」
「今年は開幕戦を除いて全て表彰台に上がっていて、大会ごとにウェイトが積まれていく状況でした。それでも、決勝でしっかりと上位にいられる方法を考え、実践してきました。その努力の積み重ねが、チーム全体のパフォーマンスをアップさせてきたのでしょう。この最終戦で1位を走れているのは夢のようだと実感しながら走っていました。猪爪監督率いる日本自動車大学校の集大成となった一戦だったと思います」

野島俊哉
「今回は金井選手・山野選手のスティントとPIT作業で築いた貯金もあって、僕のスティントではほとんど全開で走ることができました。チームの皆さんに感謝しています。決勝中はマシンのバランスがずっと良くて、タイヤの状況に関わらず挙動の変化がすごく少なかったです。それが安定して走れる要因でした。シリーズチャンピオンを獲得できたということについては、まだ実感がなくて本当に信じられないという気持ちです。開幕戦の時は山野選手の怪我や、クルマを作り直さないといけないこと、さらに学生メンバーも入れ替わるということで正直不安もありました。でもそこから全員で作り上げて、最後まで努力し続けたからこそ、シリーズチャンピオンになれたんだと思います。」

猪爪俊之監督
「序盤はライバル達が先行しましたが、72号車は周りのペースに乱されず、決められた燃料を決められた時間で使うという事を淡々と遂行していきました。今回も学生たちのピットストップ作業がすごく速かった。これも勝利につながる大きな要因になりました」
「S耐デビューから、シリーズチャンピオンまで4年かかりましが、特に今年は開幕戦での全損クラッシュから新車を製作してのいきなりの富士24時間レース。チーム力を試されているんだな？という思いもあり、大好きな【宮本浩次】さんの歌を口ずさみながら、「私達は絶対に負けない！絶対に諦めない」という想いでずっと全力で戦い続けました。この栄冠はNATSの皆さん、ドライバーのみんな、スポンサー様やファンの皆様と共に獲得した一生の宝物です。
本当に有難うございました。」

SEIWA SANGYO ÖHLINS -JIN- MOTORSPORT NATS